

下山の思想

2025. 10. 29

体力がなくなってきた。実際に体を動かすほうの体力のことだが、違う体力もなくなってきた。長い文章を読む体力である。よほど興味のあるものでないと、長い時間、読み続けることが難しくなってきた。

以前は、何冊もの本を同時並行で少しずつ読んでいく併読のスタイルだったので、同じ本をずっと読んでいる必要がなかった。ところが、ものごとへの興味が薄らいでいるのか、併読のための本が見つからない。そのため、併読が成り立たない。仕方なく、一冊の本を読み始める。続かない。

大学入試対策の国語の問題集を見ることがある。そこには、今の私にとっては、ちょうどよい分量の文章が載っている。評論や小説などである。さすがに入試問題に採用されるだけあって良質である。読んでみると、引き込まれていく。これならば読める。

そういえば、高校生のとき、テスト自体は大嫌いだった。しかし、国語の文章問題を読むのは好きだった。あの時間のおかげで、小説だけでなく、論説や評論と出合うことができた。どれもおもしろかった。問題など解かずに、ずっと読んでいたかった。

テスト問題の最後には、作者名、筆署名と作品名が載っていた。気に入った文章があると、その本を手に入れ、全文を読んだことがあった。一冊を読み終えると、なぜだかちょっとだけ大人になったような気がした。読み通すことができたという自信のようなものも得ることができた。

大学入試問題集に、五木寛之さんの『下山の思想』が載っていた。もちろん、一部だけなのだが、十分におもしろい。五木寛之さんは、好きな作家の一人である。なにせ、だいぶ前になるが、五木寛之さんの文庫本をすべて読破したほどである。今となっては、あの頃の燃えるようなエネルギーがうらやましい。

登山を人間の一生に例えると、50歳までが登山で、それ以後が下山だろうか。私の人生は、下山の真っ最中である。今は、登山よりも下山のほうに大きな関心が集まる時代に入ったように思う。安全に、しかも確実に下山するというだけの話ではない。下山の中に、登山の本質を見いだそうとしているように思える。

ふと考えた。世の中全体が下山に向かうべきではないか。敗戦の焼け跡から、頂上を目指して登り続けてきた。大震災からの復興はどうだろうか。再生の目標は、どこにあるのか。何をイメージして復興するのか。それは山頂ではないだろう。再び世界の経済大国という頂上を目指すのではなく、実り多い成熟した下山をこそ思い描くべきではないのか。

頂上をきわめた後は、下山しなければならない。それが登山というものである。登山のときには、上だけを見ていればよかった。だが、下山は違う。いろいろなものが目に入ってしまう。それだけにむずかしいが、おもしろみもある。